

個別最適な学びと協働的な学びの 一体的な充実を図る授業の在り方 の研究



令和7年11月14日(金)
義務教育課 中学校グループ

個別最適な学びと協働的な学びとは

1 個別最適な学び

- ・「主体的・対話的で深い学び」を通じた資質・能力の育成を、誰一人取り残さず全ての子供に実現できるようにしていくための視点
- ・子供一人一人の興味関心や学習特性を踏まえる

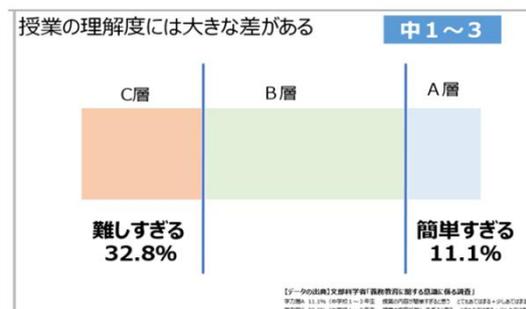
2 協働的な学び

- ・一人一人で学ぶ場面でも意図的に協働的な場面を設ける（お互いの考えを共有する時間を設けるなど）
- ・皆で学ぶ場面でも個々の学びが深まるような工夫を行う（それぞれが調べたことを持ち寄って議論する）

これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていく

課題

- 「個別最適な学び」の場面でC層の生徒への支援が十分でないために「協働的な学び」が機能していない。
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」が別個に捉えられており、往還が意識されていない。



【出典】「みるみる」個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のためのサポートマガジン（文部科学省）

研究仮説

個別最適な学びと協働的な学びを一体化して主体的・対話的で深い学びを実現するためには、C層の生徒に対する手立てを工夫することが効果的であろう。

R7年度（1年目）

1. 6教科（国語科、数学科、英語科、社会科、理科、美術科）の指導主事が過去の実践を踏まえて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点から工夫を加えた単元計画・学習指導案を作成する。
2. 単元計画・学習指導案をグループ内で共有し、
 - ①授業において何を解決したいと考えたか
 - ②その解決のためにどのような手立てを考えたかについて説明し合い、情報を整理する。

研究の過程

各指導主事が工夫に取り組んだ手立て

- S（国語科）：より丁寧な見取りに対応した学習の手立て
- I（数学科）：生徒が主体的に学ぶための手立て
- H（英語科）：生徒が自己調整を働かせるための手立て
- T（社会科）：教師が生徒の困り感を見落とさない手立て
- K（理科）：生徒自身の疑問で課題を設定するための手立て
- N（美術科）：生徒一人一人に応じた学習の手立て

研究の過程

R7年度（1年目）

3. 他の指導主事の視点・工夫を取り入れて単元計画・学習指導案を検討・再構成する。

- | | |
|---------------|---------------|
| ・ S（国） × K（理） | ・ H（英） × T（社） |
| ・ I（数） × S（国） | ・ T（社） × H（英） |
| ・ K（理） × N（美） | ・ N（美） × I（数） |

4. 再構成した単元計画・学習指導案について協議した内容を基に、個別最適な学びと協働的な学びの一体化のための視点と工夫を「今までの指導に+1」として教科ごとにまとめる。

国語科：主体的・協働的な学びにつなぐ

今までの指導に＋1

生徒一人ひとりをより丁寧に見取り、対応する手立て

- ✓ **見通しをもたせる工夫**
 - ・ 単元計画の周知を図り、学習課題の工夫と振り返りを重視することで、主体的な取組につなげる。
- ✓ **生徒一人一人の充実した見取り**
 - ・ 生徒の到達度や困り感を的確に見極め、生徒自らが**捨選択**できるような手立てを講じる。
- ✓ **思考ツール・モデルの活用**
 - ・ 生徒一人一人が、課題解決の最適な方法を選択できるように思考ツールやモデルを提示する。
- ✓ **ICTの活用**
 - ・ 生成AIやヒントルームを活用して、必要に応じて自力解決の参考にできるような手立てに活用する。
- ✓ **意見交流**
 - ・ ペアやグループでの交流を通して、異なる意見に触れ、考えを広げ、深める。

英語科：見取りと支援の充実で全ての生徒が自己調整を

今までの指導に＋1

自己調整の視点に教師の見取りの視点を加え、誰一人取り残さない授業へ

- ✓ **環境の整備**
 - ✓ **相談タイムやアドバイスタイム**
 - ✓ **自己評価や相互評価**
 - ✓ **動画やスライドへの記録**
 - ✓ **共同編集機能の活用**
- ・ 個々の生徒のニーズ（個別でじっくり取り組みたい生徒、協働で相談しながら進めたい生徒など）に対応する場を整えることで、学びを自分で選択できるようにする。
 - ・ 言語活動後に自己評価や相互評価をすることで、自己の成長を実感したり、課題達成のために何をしたらよいかに気付いたりできるようにする。また、記録を基にアドバイスをし合うなど、自己調整のきっかけになるようにする。
 - ・ T（社）の視点で活動の停滞、学びの孤立化、思考の迷走、学習方略のミスマッチなどが起こっている学習者を把握し、個別に支援することで自己調整を働かせられるようにする。

数学科：協働的な学びにつなぐための個別最適な学び

今までの指導に＋１

数学が得意な子に頼る授業から一人一人が主体的に課題に取り組む授業へ

- ✓ **課題の工夫**
 - ・全ての生徒が取り組むことができ、生徒一人一人が自分なりに解決に向けた活動を始めることができる。
- ✓ **学びの場の選択**
 - ・生徒一人一人の特性を生かした学びができる。
- ✓ **思考ツール・ICT活用**
 - ・生徒一人一人が、自分の考えを持って、他者の考えと比較・検討し、協働的に学びにつなげることができる。
- ✓ **発問による支援**
 - ・教師や生徒の問い返しなどの発問で、深い学びへとつなげることができる。
- ✓ **習熟度別確認問題**
 - ・自分の学びを振り返り、自分にとって必要な問題を選択することができる。

社会科：生徒の活動・思考はどの場面でなぜ立ち止まるか

今までの指導に＋１

ICTを活用した見取りの場面と視点、支援の手立て

- ✓ **学習方法の「ミスマッチ」**
 - 例：学習計画と進捗状況（共有ドキュメントの編集状況など）が乖離している。
 - ・自己調整に向かえるように、事前に見通しをもたせる声掛けや、効果的な学習方法のモデルを示す。
 - ・振り返り項目に「次時に向けた学び方の再調整」を設ける。
- ✓ **情報収集の「停滞」**
 - 例：参照サイトのアドレス貼付が少ない。
 - ・事前に準備した参考資料リストを提示し、選択させる。
- ✓ **思考の「迷走」**
 - 例：共有ドキュメントの編集履歴更新が頻繁、または少ない。
 - ・他者参照や思考ツールでの情報整理方法を選択させる。
- ✓ **協働場面での「孤立」**
 - 例：共同編集ドキュメント上でコメントの往来が少ない。
 - ・他者参照を促す。意図的に指名し、他の生徒の意識を向けさせる。

理科：主体的・協働的な実験を目指して

今までの指導に＋１

自分で計画、自分で選択、みんなで考察する実験活動

- ✓ **生徒自ら実験を計画** ・実験を自分事にさせる。
- ✓ **生徒が選択できる環境** ・生徒一人一人が理解しやすいものを、生徒自身で選択できる環境を準備する。
・生徒自身に実験方法や実験道具を選択させるとき、実証性、再現性、客観性を意識させる。
- ✓ **ICTの活用** ・実験を動画で記録させることで、生徒は自分のタイミングで何度も見返すことができる。
・実験結果を見える化することで、生徒は他班の意見を参考にできる。
- ✓ **有効的な対話** ・対話が伝達で終わらせないために、教師は話す視点を明確にする。
- ✓ **単元の最後には** ・教科書で得た知識、技術を生徒一人一人が発揮できる実験を設定することで、深い学びにつなげる。

美術科：生徒一人一人に応じた学習の手立て

今までの指導に＋１

自分の主題（課題）に合う表現方法を選択する

- ✓ **主題を生み出す** ・自分の作品の主題（課題）を設定することで、作品に対する思いを高めることができる。
- ✓ **材料・表現方法の選択** ・材料や表現方法を選択できることによって、より自分が表現したいものに近づけることができる。
- ✓ **制作活動の計画** ・自分の表現方法に合わせた制作の計画を立てる。また制作途中で計画を見直し調整することができる。
- ✓ **ICTの活用** ・学習の記録（ポートフォリオ、作品集）や資料（画像、意見共有）を学習に生かすことができる。
- ✓ **意見交流** ・グループでの話し合いや、対話型の鑑賞で個人の考えを深めることができる。

今後の予定・来年度に向けて

「総合的な学習の時間」で
主体的・対話的で深い学び
を実現するために

1. 対象とする単元の検討
 - ・ 学年、学校規模の設定
 - ・ 探究課題
 - ・ 単元目標と評価規準
2. 1年目の成果を探究的な学習の過程にリンクさせた単元計画の作成

